雜報

第三十回文科學術談話會記事

□ペーパーの肉色とインクの紺青とで、氣持のいゝハッキリした感を起させる豫告が、玄關前の掲示板に貼られてから一週間になる、二百人の會員の豫期が殆ど其頂點に達した今日、談話會の幕は水のやうに澄み切つた秋の空氣の中に切り落された。

□會場の後の筆記席に陣取つて、目の前に動いて居る二百人の頭を越して向ふを見る、左の窓から斜にさした秋の太陽が、あらゆるものに薄いかげをつけて、プログラムと平安平城京の圖を壁に貼つた鋲がさかしげに光つてゐる、圓いテーブルを飾つた花瓶の青磁色と、天井を區切つた框の薄青とが、會場の明るい空氣を落ち着かせてゐる。

□今日の會場は扇形に造られてゐる、演壇が其要になつて、先生と賛助員との席が左右の親骨となり、地紙の位置は二百人の會員で埋められた、下村先生、西村先生、垣内先生、細田先生、碧海先生の間々を秋草の淡い花が飾つて、草色のテーブル掛が靜に垂れてゐる、賛助員の方をも兩三名御見受けした、賛助員席に空席のない狀態に達する日はいつであらうか、委員は會毎に大なる豫期を持つてこの席を造つてゐる。

□開會の辭が終ると、美しい講演者が後の白壁から浮き出たやうに正面に現はれて、朗かな聲が豫期に滿ちた空氣を振はせる、今日の講演は凡て講演欄にあるし、部長も御意見を發表せられたから、今又此處にそ

れを繰り返すの煩は避ける、只今度は一題材を三つ—四つに區分して、三人—四人で講演された、これは一時間余に亘る一題材を一人で話すよりも、聞く方では變化があり話す方では多人數に發表の練習が出來るといふ趣意から始めたのであつたが、その効果に就いては少しく研究を要すると思ふ。

□英語の朗讀は假令それが充分に了解出來ずとも、猶一種の興味を起させるものである、殊に今日の Blow, bugle, answer, echoes, dying, dying, dying, と云ふ處は何となく暗い氣分になつた、英語の朗讀はいゝ、漢文國語の朗讀も假令それが目先の變つた英語の味はなくとも、亦文科として眞面目に研究すべきものである、そして已に前回に於てはこの試みがあつたのである、今後に於て漢文國語の朗讀がこの會で研究さるゝ事を切望する。

□前回あたりから、講演者を迎へ送る拍手が盛に行はるゝやうになつた、會が元氣づいて氣持のいゝものである、講演者もさぞ張合があらうと思ふ、而し先生の時丈は猶ほ教室式に立つて＝否半分立つて＝禮をする、これは習慣からでもあらうが、かやうな會合にはやはり盛な拍手で迎へたいものである。

□部長から最後に次のやうなお話があつた、「今日は豫告通り菅原學士の御講演を願ふ筈であつたが、御病氣の爲にそれを果す事が出來ないので、殘念ながらこれで終りとする、自分はこれから今日の會を開いた計畫と之を表はした話し方及研究法、もう一つ、色彩の話＝これは文展を見る參考にもなるかと思ふので＝とに就て短見を述べて見やうと思ふ、今日の會は突然の思ひ付ではなく會を引受けた最初からの豫定計畫である、目的は先つ題目を美術の研究とし方法は確實なる研究方法を實際に應用して見たいといふ考へでかやうな題を選んだのである、これに當られた方は二部の人でありますので日常學習せらるゝ地理歴史の

史の智識の上から研究した上に美學美術の評論を加へて頂きたいといふ方針を採つた、部分部分に就て云ふと日本建築を話した方は多くの材料を讀破し、西洋建築を話した方は東京の一々の建築を見て歩いて其實物に書物で讀んだ様式を當て嵌めて考へたので、其の勞作の力は大したものである。この種類の研究の態度方法をよく考へていたゞきたい。次に話し方は序說と結論とは第二第三の記事的叙事的の部分とは違つて話し難い處である、第二第三の內容から幾つかの要點を抽いて話す事は容易に出來ない事で、其話し振は內容の整頓と相俟つて多くの練習を要するのである、議論的の談話を發表せらるゝ機會は比較的少ないかと思ふが自分の所信を吐露するといふ話し方をもつと研究、練習してもらひたい事、次に「都市の研究は大問題である、昔から今迄の日本人の住處の形を大別して三つの樣式としその特點を述べて最後に「東京」に及んで近世都市の樣式を實際的に述へられたのである、研究の上からも發表の上からも困難である、町の大さを四と五といふやうな比例にして、何里何町といふ乾燥な數字を並べなかつたのは非常に面白い尙この比例がどういふ感を與へるかを加へると一層よかつたと思ふ、とにかくこの研究に依つて東洋西洋の都市の樣式經營をも知り得る事の出來たのは大なる賜物であつた。英語も發音がハッキりしてよかつた大体前回よりも研究方法に於て大に進んだ事を喜んでゐる。

次に色彩の話であるが、實は文部省美術展覽會の開期を機としてその開會中に權威ある批評家の話を聞かうと思つたが會場の都合や何かで其の意を果さなかつたので「色彩」の美術的研究を話して頂いてせめてこの目的に副ふやうにと考へたがこれ亦失敗した故に甚た僭越なから「文展」を中心として色彩のことを二三申し上げて參考に供したいと思ふ。現在の美術批評家には大別して三の傾向がある主觀的に題材を主

として批評する人、次に日本畫又は西洋畫の技術の側から客觀的に批評する人、次は作物の與へる印象を勝手に出鱈目に并へて批評をする人と種々あるが其內技術に就いてこれまで文展に現はれる問題の中最も多く論せられたのはいつも色彩であつた。一昨年頃から泥繪具を用ひた色彩の强いもの＝例へば昨年では「溫室」がそれである＝が表はれ、昨年からはこの繪具の勢力が增して來たと同時に一層色彩の議論が盛になつて來た作家の方からいふと、もと色彩の美感に四つある、一は寒い色と光とで其調和を主とした日本在來の色彩趣味、二は寫眞的に色と光とをかく寫實的のもの、三は天然を見るのに半眼で見た色彩、四は全眼を開いて見たものである　一は在來我々の見た日本畫に行はれた手法で二三四は主として西洋畫の影響を受けて生した技巧で其の內二の內には一に近いものと三四に近いものとある三は所謂朦朧体と惡くいはれた手法でだん〳〵少くなつて四か著しく多くなつた。四は基色その物に依つて表はすので極彩色でなければならぬその爲に泥繪具が用ゐられるのである。之は細末であつて濃淡も明暗も出來ない、又强度も夫れ以上に强くしたり弱くしたりする事は不可能である、是非共塗つた丈の繪具で感じを表はさねばならぬ、それ故これはコントラストによる外はない、コントラストの巧なのが成功するのである、もしこのコントラストか巧であるなら數歩を退いて見ると、ハッキリ基色が表はれのである展覽會の如き場所ではこれが最も人目を惹き易い故にこれを最新式としてゐるのであるが、この試みは日本畫の特長を發揮する方針であるかは疑ひがある、要するに人々の趣味により素養によりいろ〳〵意見もあることゝ思ふがこれには三つの問題かあると思ふ一は展覽會の目的及設備等から考へて國民一般の趣味を奬勵する爲の公衆美術としてはどちらがいゝか、又我々が室內の冷たい光に調和する爲に苦心した日本畫を、ガラス窓の光の

下に出すべきではないのではあるまいか等の問題に就て注意して貰ひたい、二には作家の技巧に就いて考へると又其繪の上から現代の繪がいかに發達し來り、いかなる程度にあるか又いかに變遷しやうとしてゐるかを見て貰ひたい、三には盛に現はれる批評研究が果して研究賞鑒の道を盡くして居るかどうか、これ等は我々の學術的又敎育的に注意すべき點であると考へるこれは色彩のみの點から見たのであるが他の點からも種々、展覽會から學ふべきところがあると考へる云々

■一二の欠點は止むを得ない、二百人が一樣に期待した菅原先生の御講演のなかつた遺憾はあつたが、大体に於て豫期通りの結果を告げて會は終つた、會員は去つた、殘された椅子とテーブルと花瓶と植木鉢とに、尙談話會の氣分が纏つて、外は秋の晴れ渡つた太陽が降りそそいでゐる、「いゝ文科會日和だつた」と誰かの云ふのが聞える、秋はいよいよ深くなり文科會の前途は遼遠である、切に會員諸姉の御自愛を祈る。

(T. N.)

蓮嶽晴雪　鹽谷宕陰

朝暾之前。暮靄之際。望岳於駿岡之西。突兀萬仞。芙蓉帶天。何處無是觀。唯瞻諸蒼溪翠樾之表最佳。南至日。峰尖呑落日。殊爲絕奇。更懸以朔旦冬至之歲審驗之。

（若靈廿勝小記）

回想錄

■回顧

千葉安良

會長中川校長閣下　部長下田次郎先生、下村三四吉先生、岡田みつ子先生、垣内松三先生の周密な御指導御監督のもとに、文科住任關根正直先生を初め他諸先生方の直接間接の御薫陶御示敎にあづかり、多數幹事諸氏の勵精會務を處理せられましたこと、全贊助員全會員諸姉の御援助御同情を蒙りましたことによつて、茲に本會誌も第十號を發刊いたすこととなりましたのは、誠にめでたく有り難く存じます謹んで祝意を表しますとともに、上記のお方々並びに初號から六號に至る會計方兼編輯發行名義人であられた伊澤光雄氏、八號から引きつゞき現在の會計をあづからるゝ竹田みち氏に對して、深厚なる謝意を表するのであります。

四年になつたらあれもかうしよう。これもかうしようと、私共の一年二年三年の頃には、研學上修德上の諸便宜に關することを始め、寄宿舍生活の諸雜事に至るまで、いろ〳〵の改良意見を抱いて居つたものでした。そのもくろみの一つが、此の文科會誌をも產み出したのです。創刊當時の幹事は、その頃文科四年生であつた今小樽に居る河崎と、水戸に居る目良（舊姓關）とで、時の部長下田次郎先生と、櫻蔭會の主事を御務めになつて入らしつた岡田みつ子先生との一方ならぬ御盡力を受けて、すゐぶん心も苦しめ骨も折つて、會誌刊行の基礎を確實に造つて呉れたのでした。此の意味に於いて、私は重ねて、兩先生と此の二氏とに感謝の意を表するのであります。

初號發刊に際しての、中川會長からの御訓言は、「一時にして廢らぬやうに」「切り貼的にならぬやうに」「あまり專門的のものばかりに偏らず、一般的材料を研究するやうに」との三事に關してでありました。又下田部長からは、「此の會誌の客觀的價値は、學校の文科の實際がありのまゝに投寫されるところ學校の一部の側面史をなすところにあるが、主觀的價値は或意味に於いて　絕對無限に豐富である」といふことと、「在學生の活動とともに、卒業生の援助